

「シェイクスピア」を想像／創造する

ポウプ版シェイクスピア全集

高森暁子

1. はじめに

1710年の著作権法の制定を視野に入れ、その直前にシェイクスピアの第4フォリオの印刷・出版権を買い取っていたジェイコブ・トンソンは、市場の潜在的なニーズを先取りし、編纂者名を前面に出した、新たなスタイルのシェイクスピア全集の出版に乗り出した。このトンソンが仕掛けたシェイクスピア出版ビジネスは、18世紀におけるシェイクスピアの知名度と人気の向上に決定的な影響を与えることになる。その全集出版企画において、ニコラス・ロウに続く二代目編者に選ばれたのが、ホメーロスの『イーリアス』翻訳で名声を高めていた、文壇スターのポウプであった。ホメーロス翻訳に際しては、既に失われた異教世界の作者に寛大な眼差しを向けながら、遠い過去の偉大な芸術の息吹と輝きを自国語に移すという、芸術的な「創作」活動に取り組むことができたポウプであったが、時代的にも文化的にも直接の祖先であるシェイクスピアに対しては、ホメーロスとポウプの間にあった安全な距離感は消滅する。ポウプが全集編纂において最も熱心に行ったのが、シェイクスピアの美点と欠点の指摘であったが、美点の称賛と同じかそれ以上の熱量をもって、欠点に対して寛容でいらなかった過干渉ぶりは、正典化の道を進むシェイクスピアに対する、同じ文学伝統に連なる詩人としてのポウプの自意識の表れだったのかもしれない。1725年に出版されたポウプ版シェイクスピア全集は、その恣意的かつ不徹底なテキスト校訂の姿勢が、すぐにルイス・シオポールドから手厳しく批判されたものの、ポウプが始めた注釈の導入や古版本との校合は、その後のシェイクスピアのテキスト編纂の方針を不可逆的に決定づける出来事でもあった。

2. ポウプのシェイクスピア評価

全集序文に表れたポウプのシェイクスピア評価を端的に言えば、「美点と欠点を併せ持つ自然の天才」ということになる。シェイクスピアの美点と欠点を区別しようとする試みを、ポウプはイギリスの読書人の美的・道徳的感覚を養うための愛国的なプロジェクトだと捉えていた。彼にとってシェイクスピアは、そのための良い例と悪い例をふんだんに提供できるやりがいのある素材であった。新古典主義文化の基準に照らせば、誇るべき文学的特長や功績をほとんど持ち合わせていなかったシェイクスピアは、別の評価基準、しかも時代に影響されない普遍性を備えた基準によって弁護される必要があった。そこで「自然」という概念が、シェイクスピアの技術や規則の欠如を補うものとして再発見されていく。ベン・ジョンソンやドライデン、アディソンをはじめ、様々な作家や批評家がシェイクスピアと自然の結びつきを表現してきた伝統に、ポウプも自らの表現を加えている。第1フォリオの読者に向けた序文の中で、ヘミングとコンデルがシェイクスピアを「自然の幸せな模倣者」と呼んだのを受けて、ポウプはシェイクスピアを「自然の模倣者というよりも道具」、つまり自然が自らを表す手段、媒体なのだとして述べている。ポウプと同じく「自然」の詩人と考えていたホメーロスよりも、シェイクスピアはさらに自然との結びつきが直接的で、何の学問的伝統や模範も必要としなかったという点が強調されている。一方でシェイクスピアの欠点については、彼がまだ文化的に粗野な時代の演劇人であったことに因るとポウプは主張する。このポウプの反劇場主義は、彼のテキスト編纂方針にも色濃く反映されている。

3. ポウプの編纂方針

シェイクスピア全集編纂プロジェクトの前任者であるニコラス・ロウは、彼自身が当時の人気劇作家であったこともあり、読者が舞台を意識（あるいは視覚化）しながらシェイクスピアを読むという体験ができるよう、挿絵の挿入など様々な工夫を施していた。同時に、大判のフォリオを扱いやすい小型のオクタボ版に変更し、シェイクスピアの伝記をつけるなど、pageとstageを橋渡しするユーザー・フレンドリーな版をトンソンのプロデューサーのもとに作り上げたのがロウだった。一方でロウ版にはまだ注釈はなく、テキストの分かりづらい箇所や古くなってしまった言葉に関する説明もついていなかった。続くポウプ版全集は、読みものとしてのシェイクスピアに焦点を当て、初めて注釈が導入されたことで、シェイクスピアの古典化・正典化を意識した編纂姿勢が見られる。ポウプはシェイクスピアを自国の古典作家の地位にふさわしく整美しようとするにあたり、この偉大な詩人を覆い隠している文化的・言語的なくもりを取り除こうとした。以前の版のつづり、句読点、文法を現代化し、韻律を整え、時代精神に合わせて、言語面に限らず不規則性、曖昧さ、冗長さを排除するべくテキストに積極的に介入した。ポウプ版のテキストには、アステリスクや逆コンマ、ダガー等の独自の記号がつけられているのが特徴だが、ポウプはそれらを、作品の美点と欠点を可視的に示す合理的で機能的な批評方法だと考えていた。

古版本との校合を本格化させたこともまた、ポウプ版の書誌学的な功績であった。ポウプは全集編纂にあたり、

第1フォリオ以前のクォートの提供を呼びかける広告を出し、全集の巻末には参照したクォートの一覧もつけている。とはいえ、ポウプによるクォートの調査は、包括的とも体系的とも呼べるものではなかった。ポウプは概してフォリオよりもクォートを相対的に評価していたが、それはクォートの段階で既に存在していたテキストの汚染が、全集版のフォリオには蓄積され、さらに劣化が進んでいると考えていたためである。加えてシェイクスピア時代の役者の周縁的な地位へのポウプの偏見は、シェイクスピアの役者仲間が出版した第1フォリオに対する彼の根強い不信感を生んでいた。役者の介入や現場での変更がテキストを無秩序に変化させると考えていたポウプにとって、劇場はシェイクスピアのテキストに有害な影響を与え、その後の印刷物への転換プロセスを混乱させる非常に厄介な場所であった。それと同時に、この「テキストの汚染を生む芝居小屋」という言説は、ポウプがシェイクスピアを弁護する上でも、編纂者としてテキストに介入的な立場を取る上でも、きわめて便利なものでもあった。シェイクスピアのテキストの誤りや不備は、無責任な変更や出版で作者性を弱めてしまったシェイクスピア以外の要素に起因するという理屈である。これによりポウプは、非シェイクスピア的な挿入や不純物を排除するべく、テキストに大胆に介入することを自らに許すことができたのだ。

4. 索引の体系化

ポウプ版全集は、実はそのパラテキストに特筆すべき点がある。索引の体系化である。既にロウ版全集の第3版に簡単な索引がついてはいたものの、ポウプ版ではそれが7項目にわたって体系的に整理され、大幅に充実したものになっている。特定の見出し語のもとに書籍からの抜粋を整理するという、コモンプレイングの伝統に基づいて作成されたポウプ版の索引は、読み物としてシェイクスピアのテキストに親しみ、シェイクスピアの詩的な言葉を実人生に生かすための道徳的な指南書としての性格を備えている。それは「引用元としてのシェイクスピア」という、実用的な利用法の発展に貢献した。いわばシェイクスピアの言葉のデータベース化である。このことは、シェイクスピアの言葉は人間や人生に関する洞察の宝庫だという認識を、広く一般に浸透させることにもつながった。stageからpageへ、そして読者が「シェイクスピアの戯曲を読む」という行為から「シェイクスピアの言葉を使って書く、話す、考える」という行為に展開する道筋をつけたことが、ポウプ版全集の画期的な読者サービスであった。

とはいえポウプ版の索引のスタイルは、全くオリジナルなアイディアというわけではなかった。18世紀初頭に出版されたエドワード・ビッシュの『英国詩の技法』(1702)は、詩作のためのハンドブックではあったが、多様な文学テキストからの抜粋をコモンプレイング形式でまとめたセクションを含むことから、一般向けの読み物としても大いに人気を博し、多くの模倣作品を生み出していた。このような既に人気のあったアンソロジーのスタイルの延長上に、ポウプ版の索引も存在しているのである。第一義的には戯曲本体への紐づけのために整備された索引ではあったが、場面やキーワードごとに「取り出して参照できるシェイクスピア」というアイディアの発展にも寄与し、ポウプ自身の文学的権威も相俟って、後のシェイクスピア関連の出版物に影響を与えた。その一例が1752年に出版されたウィリアム・ドッドの『シェイクスピアの美』であるが、このシェイクスピアに特化した最初の抜粋アンソロジーは、後に『ポウプの美』をはじめとした、特定の作者についての同様のフォーマットの作品群を生み出す契機にもなった。

5. 結び

ポウプが全集編纂において行ったのは、シェイクスピアが書くべきだったものを「保守的」に「復元」する試みであったが、結局のところポウプは、テキストの編纂者、シェイクスピアの18世紀への翻訳者、詩人、愛国的なジェントルマン、そして時にはポウプ自身という、その立ち位置を曖昧にしたままで編纂作業に臨んでいた。その結果創り出された「シェイクスピア」のテキストは、ページ上にポウプの声高な自意識の痕跡が残りすぎていた。とはいえポウプ版全集は、ポウプ自身の意図しなかった形で、18世紀後半のシェイクスピア崇拝を支える公共圏の形成に寄与したことも指摘しておきたい。皮肉にもポウプ版を痛烈に批判したシオボールドが次の全集企画の編者となり、本格的なシェイクスピアのテキスト校訂の道が始まった。それ以降、シェイクスピア全集の編纂は高度に専門化された学術的な営みになっていく。また、ポウプが整備した索引は、ポウプの知名度と文化的影響力によって、抜粋のアンソロジーというジャンルの規範化を促した。それにより、脱コンテキスト化、断片化したシェイクスピアの言葉の受容が拡大し、当初のポウプ版全集の読者としては想定されていなかった幅広い読者層が、様々な形でシェイクスピアの言葉を利用・消費する現象が生まれていく。すなわち「学術エリート化」と「ポピュラー化」という、相反するようで18世紀後半のシェイクスピア崇拝をともに支えた二つの方向性を、ポウプ版全集は「結果的に」両方推進するという、特異な爪痕を残していたのである。